

家庭科の保育と保育者養成の保育の接点を考える

松本 園子 (子ども学科)・草野 篤子 (家族地域支援学科)
林 薫 (発達臨床学科)・金田 利子 (名古屋芸術大学)

1 問題意識と研究の目的

今日、わが子を持つまで子どもとかかわったことがなく、どうしていいかわからないという親が増えている。そのことが虐待や育児不安の原因となる場合もある。そして若い人々には、子育ての喜びよりは大変さのほうが意識され、少子化の一因ともなっている。では、子育ての基礎となる要素、幼いものを人格としてリスペクトしつつ、いつくしみケアするという、親にもってほしい資質すなわち親性はどこで育つのであろうか。

かつては、地域の生活の中に幼い子どもたちがいた。自分の弟妹あるいは近所の子どもたちを子守りをしながら遊んだし、高齢者たちが子守をしている姿にも接することができた。そうした経験が、親性を育んだ。しかし、今日の生活の中から、こどもが親性を育てられる体験の機会はほとんど失われている。

こうした関係を生活の中で意識的に取り戻す努力は必要であるが、少子・小家族の流れを変えることは不可能であり、今日の時代に即した新しい方法が必要である。そこで期待されるのが学校教育であり、親性・親準備性を学校教育、特に家庭科の中で取り上げ、意図的に教育していくことが必要である。育てられている時代に育てることを学ぶ場、それが学校における家庭科の保育教育である。

中高の家庭科の学習指導要領では、今期の改訂から以下のように、幼い子どもと関わる内容が必須内容として取り上げられた。

中学校学習指導要領 技術・家庭 (平成 20 年 3 月告示)

○内容 A 家族・家庭と子どもの成長

(3)ーウ 幼児と触れ合うなどの活動を通して、幼児への関心を深め、かかわり方を工夫できること。

○内容の取扱い

(1)内容の「A 家族・家庭と子どもの成長」については、次のとおり取り扱ものとする。…… (3)のウについては、幼稚園や保育所等の幼児との触れ合いができるよう留意すること。

高等学校学習指導要領 (平成 21 年 3 月告示)

第 9 節 家庭 第 2 家庭総合

2 内容 (2)子どもや高齢者とのかかわりと福祉

ア子どもの発達と保育・福祉

子どもの発達と生活、子どもの福祉などについて理解させ、親の役割と保育の重要性や地域及び社会の果たす役割について認識させるとともに、子どもを生み育てることの意義や子どもとかかわることの重要性について考えさせる。

3 内容の取扱い(1)ア 内容の(2)のアについては、学校や地域の実情に応じて、学校家庭クラブ活動等との関連を図り、幼稚園や保育所等の乳幼児、近隣の小学校低学年児童等との触れ合いや交流の機会をもつよう努めること。

触れ合いの場の多くは保育所・幼稚園児との交流である。この点に関する実践では先進的事例においては園の側が積極的に受け入れたり、幼児が学校に訪問したりと、多くの実践がすでに蓄積さ

れてきている。

しかし、現状では、保育所・幼稚園の側の大部分において、受け入れの意義を十分に把握しているとはいえない。家庭科における保育教育、とりわけ中高生、あるいは小学生を保育の場に受け入れることは、市民の保育力を育てる教育である。こうして、親性・親準備性を培われた子どもが親となれば、批判精神を持ちつつ幼稚園・保育園と共に子育てをしていこうという視点を持ち、保育の質向上に寄与するであろう。このような循環関係を保育者養成課程段階においてもとりあげ、理解させる必要がある。

本研究は、以上の問題意識から、家庭科の保育と保育者養成の保育の接点を考え、保育者養成段階におけるプログラムを再考することを目的とする。

2 本年度の研究実績

本研究は、本学において2004年～2009年の6年間、毎年開催されてきた「家庭科の保育と保育者養成の保育をつなぐシンポジウム」を土台にすすめてきた。このシンポジウムについては、本年報において毎年その成果が報告されているが、各回のテーマは以下のとおりである。

第1回 中・高家庭科における「保育」の評価

を考える

第2回 中高生の保育実習を考える

第3回 「親性準備性教育」について考える

第4回 中高生とのふれあいは乳幼児に何をもたらすか

第5回 親と共に進める保育の創造—親理解と家族援助のあり方をめぐって

第6回 少子化対策、急がば回れ！—家庭科と保育実践の結合が鍵

本年度はこれらのシンポジウムの成果をまとめ、そこから今後の課題を抽出することに力を注いだ。具体的には、シンポジウムの記録テープを起こし、読み込み、現時点で保育者養成の立場から、家庭科教育との結合にどのような意味があるかを討論してきた。現在、シンポジウム記録を文章化し、これらを補足修正・再構成して公刊すべく準備中である。

今後、保育者側の中高生受け入れへの関心と指導力の向上が必要である。本研究の今後の課題としては、保育者養成教育におけるカリキュラムにその点での内容を盛り込む提言をまとめることをめざす。その前提として保育所・幼稚園の受け入れ状況の実態調査や、保育者の意識調査を実施し、問題点を明らかにしていきたい。

「三層構造の歴史的意義と今後の可能性」 —附属白梅幼稚園の実践との関連から

保育科 花原 幹夫

本研究の目的は、久保田浩氏の三層構造論の歴史的意義と今後の可能性について、白梅学園大学附属白梅幼稚園（以下、附属白梅幼稚園と略記）の実践等と関連づけながら、検討をしていくことである。本研究は、「保育構造研究会」に所属する教員によって構成されている。構成教員は、金田利子、高田文子、瀧口優、鈴木慎一郎、花原幹夫、

川喜田昌代である。この研究会は、保育の構造について広く学びたいという意識の基に、2006年4月25日に発足した組織である。これまでに、文献購読、講師を招聘しての勉強会等を通して、研究の基礎を築いてきた（「研究年報」No.12:2007年、No.13:2008年、No.14:2009年に掲載）。

2010年度の研究申請申請書では、以下の4点